

「国営昭和記念公園」を歩く

砂川闘争をきっかけに、米軍立川基地が全面返還されたのは1977年。その跡地に広大な面積を誇る昭和記念公園が造られた。これは砂川闘争のもたらした「光」にも見える。一方で沖縄は全土が基地化してゆき、横田基地では大規模な拡張が行われ、冷戦時代に「核戦争3分前」の危機に陥ったことを忘れまい。今や事故多発のオスプレイが東京の空を日常的に飛び交い、公園のすぐ隣の自衛隊駐屯地に飛来するのも時間の問題。砂川闘争の「光」は未だ闇の中に埋もれている…。

本企画は、旧陸軍時代と米軍時代の航空写真を、現在の公園に重ね合わせた地図をたどって、かつての知られざる基地の歴史に触れるツアーである。大地と基地の記憶を刻む地図を片手に、「異空間」としての昭和記念公園を体験してみてはいかがだろうか。



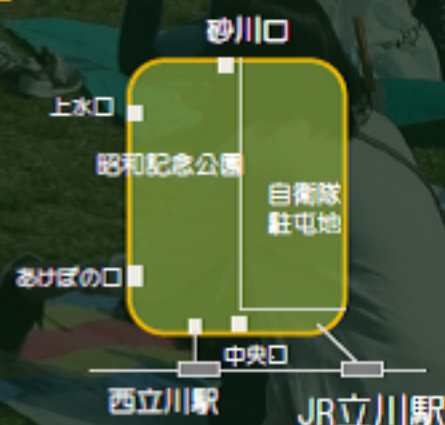
2018年5月19日(土) 10:00~15:00

集合場所/昭和記念公園砂川口(10:00)

参加費/500円(資料代/但し入園料は別)申し込み不要

○交通:

JR立川北口 ②番バス乗り場乗車 昭和記念公園砂川口下車
(立川口、昭島口、玉川上水口から公園内を歩いて来るとも可能)



○旅の構成

米軍立川基地時代(1945~1977)

米軍立川基地は終戦から1977年まで、アメリカにおける極東アジアの軍事戦略拠点として運用された。この30年間余りの間に実在していた米軍基地跡を辿りながら、当時の軍事施設をはじめ、米軍とその家族、基地の中と外で働く人々などの生活像に触れる。

砂川闘争の頃

1955年5月、米軍立川基地の滑走路拡張に反対する住民運動として始まったのが砂川闘争である。砂川闘争はアメリカによる朝鮮戦争からベトナム戦争への移行期に起こった市民平和運動で、その頃の基地を取り巻く国内外の情勢や住民の生活像について触れる。

旧日本陸軍時代(1921~1945)

立川基地の始まりは、帝都防衛構想の一環として岐阜から日本陸軍の第5飛行大隊が移住した1921(大正10)年にはじまる。軍国化を進める昭和に入ると、飛行場を中心に多くの軍事研究施設や武器製造工場などが次々と増殖していく。戦前の米軍による空爆の様子を交えながら当時の施設を概観する。

○旅のルート

昭和記念公園砂川口⇒こもれびの里⇒みんなの原っぱ⇒残堀川やまぶき橋・一本煙突⇒こどもの森・三本煙突跡⇒こもれびの丘

○本企画にあたって

大正10年(1921)から現在に至るまで、凡そ100年間にわたって軍事基地が運用されている立川。しかし、この基地の歴史を直に語る遺跡・遺構は殆ど「破壊」されつつある。「負の歴史」に蓋をするのではなく、真正面から向き合うことは次世代のための責務。昭和記念公園の隣に残る基地の遺構を、市民の力で「廃墟」から「遺跡」に変えられないだろうか。基地遺跡を保存し、活用することの意義と社会的な効果は極めて大きい。

